

と旧浜益村（現在の浜益区）と、平成 17 年に 1 市 2 村で合併したことにより面積が拡大している。

旭川大雪圏の上川地方を源流とする石狩川が、北海道の大地の栄養分を運び、日本海へ注ぐ河口がありサケが捕れることから、石狩市は古代からサケとともに歩んできた地域であり、郷土料理・石狩鍋発祥のまちである。明治期以降、石狩平野が砂地であったことから、畑作や酪農業が盛んに行われてきたが、昭和 3 年に花畔（ぼんなぐろ）地区の農民たちの手により、本格的な水田耕作が成功したことで、大規模な造田工事が行われ、水田地帯へと変わった。

(2) 花川北・南地区の開発経緯と状況について

高度経済成長とともに、北海道経済の中心である札幌市の人口急増により、郊外のまちへと人口の流れが生じ、その流れを引き受けるかたちで、昭和 40 年代以降、それまで農地として利用されてきた土地が大規模な宅地へと転換していき、現在の花川北地区、花川南地区が出来上がった。

花川北地区では、住みよい住宅環境を守ることを重点に考えられ、車通りの少ない閑静な住宅地区が形成されている。花川北地区には子育て施設や大型スーパーなどの生活サービス施設のほか、小・中学校や公園、医療機関なども立地している。同地区は宅地の販売が短期間であったことから、購入者の年齢層が狭く、造成当時から約 40 年が経過した現在は、市内でも高齢化が進む地区となっている。

花川南地区では、道路は格子状に配置され、小・中学校、高校のほか藤女子大学の花川キャンパスといった学校施設のほか、子育て施設や医療機関や、大型スーパーなどの生活サービス施設が立地している。

また、両地区共に戸建て住宅が多いが、花川北地区には UR 住宅をはじめとした公営の大型の集合住宅が立地している。



図 2 昭和 40 年代から宅地化された、花川南・花川北地区の位置図
(石狩市 WebGIS により筆者作成)

(2-1) 人口と市外通勤・通学者の推移について

石狩市の人口は昭和 45 年に 11,340 人、昭和 60 年には 42,220 人、平成 7 年には 53,072 人と増加してきていたが、平成 17 年 61,369 人をピークに減少傾向である。令和 2 年時点における花川北・南地区の人口は、全人口の 58,300 人に対して、38,848 人が居住しており、市全体の人口のおよそ 66%を占めている。花川北・南地区の人口についても、全市と同様に減少傾向にある。また、人口が減少している一方で、世帯数は増加傾向にあるが、1 世帯当たりの人員数は、平成 12 年では 2.75 人、令和 2 年では 2.00 人と世帯人員数が減少しており、単独世帯の増加が、背景にあると考えられる。さらに、市外への通勤・通学者数（全市）も、人口数に伴って減少傾向にはあるが、ベッドタウンとしての状況は現在も変わらない。

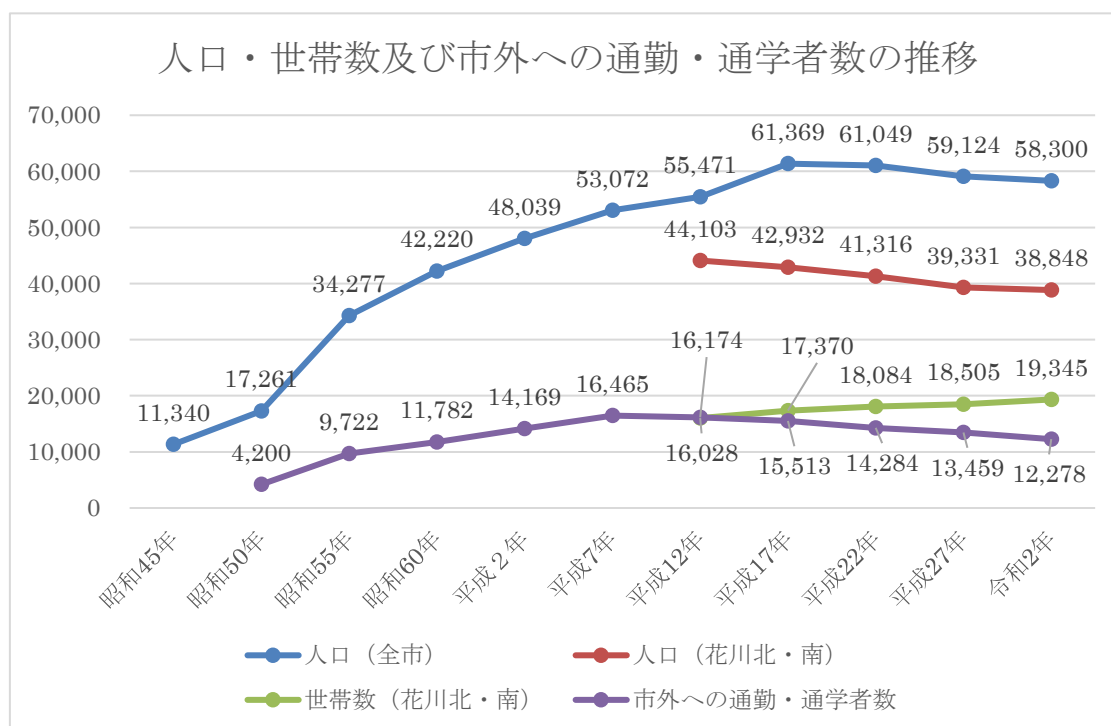


表 1 人口・世帯数及び市外への通勤・通学者数の推移
(石狩市統計情報を元に筆者作成)

※人口については各年 10 月末現在の住基人口。市外への通勤通学者数は国勢調査による。花川北・南地区の人口は、データがある平成 12 年以降を掲載。

(2-2) 年代別人口の分布について

人口ピーク時の平成 17 年 10 月時点で、最も多い世代は 50 歳代であり、およそ 20 年後である令和 5 年時点で、70 歳代の層にそのままスライドしている。30 歳代以下の年代の人口は年齢が若くなるにつれて、先細りしている。

平成 17 年、令和 5 年ともに少子高齢化が進んでいる、「つぼ型」の人口分布と言える。

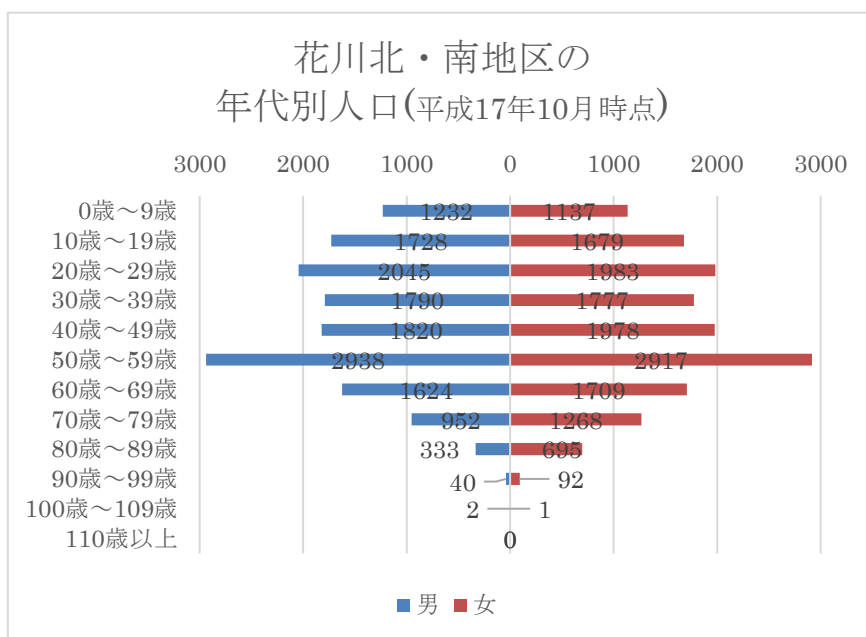


表 2 花川北・南地区の年代別人口分布 (平成 17 年 10 月時点)
(石狩市人口構造統計をもとに筆者作成)

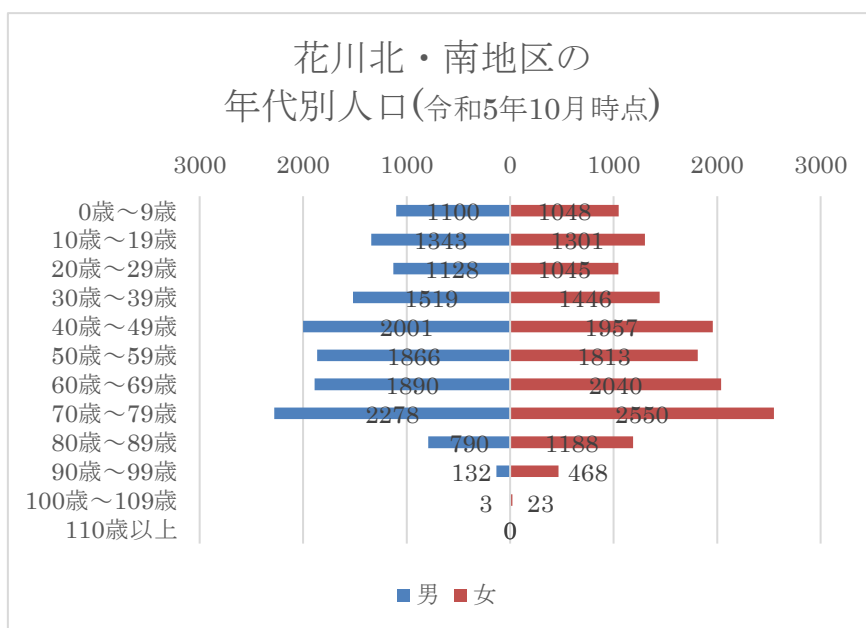


表 3 花川北・南地区の年代別人口分布 (令和 5 年 10 月時点)
(石狩市人口構造統計をもとに筆者作成)

(3-1) 花川北・南地区の公共の交流の場の現状について

地域で、主に市民生活の交流の場として活用されている公共施設に、趣味やスポーツ、文化活動の場として、会議室やホール、アリーナを備えた「花川北コミュニティセンター」、「花川南コミュニティセンター」が配置されている。また、公共図書館として、「石狩市民図書館」が配置されているほか、子育て世代・児童向けの交流施設として、「こども未来館あいぽーと」(花川北)と「ふれあいの杜子ども館ふれっコ」(樽川※花川南と至

近) の 2 か所の大型児童館がある。「ふれあいの杜子ども館ふれっコ」は、街区公園である「石狩ふれあいの杜公園」の敷地内にあり、樽川地区に立地しているが、花川南地区との境界上にあることから、花川南地区の利用者も多い。

カフェのある場所
花川北6条4丁目住宅前にある公園の敷地内に、半年間のレンタルスペースで、約37坪の広さで、トイレも完備しています。

公園を活用したふれあいサロン事業
キタ☆ロック・カフェ
花川北飛行機公園(花川北6・4・125)に突如現れた「キタ☆ロック・カフェ」。それはわかば地区地域会議が作った新たな集いの場です。

町内会がつくる憩いの場所
「わかば地区地域会議」は、検討を重ねてきた高齢者のためのサロン「キタ☆ロック・カフェ」に始まり、地域住民の間でも人気スポットとなっています。6月19日にオープンし、週3回のカフェ開催を基本に、その他講座やサークルの会場にもなっています。

健康や趣味の講座も!
カフェの運営日以外にも健康講座が催されたり、趣味のサークルの会場として活用しています。写真は「園下体操講座」の様子。

部会を作って運営!
「キタ☆ロック・カフェ」はわかば地区地域会議のモデル事業として「ふれあいサロン事業」として今年6/19からスタート。事業計画を立てたり手順を組んだり、設備の調達などカフェに関する業務は、4つの部会が役割分担して実行しています。カフェの運営日時は月・水・金曜9時～16時。

カフェでの出来事は、週1回発行の「キタ☆ロック・カフェ通信」でも紹介しています。

北三条町内会長 村上 一彦さん
副会長 田口 聖悟さん

(3-2) 「住民組織によってつくられた地域の交流の場」

花川北地区の6町内会により立ち上げられた組織によって、地域の公園内に設置されたスーパーハウスで、地域住民による高齢者のためのサロン「キタ☆ロック・カフェ」が、モデル事業として運営されている。

サロンでは、カフェが運営され、地域の高齢者の憩いの場になっている。カフェの運営日以外の日には、健康講座の会場として使用されているほか、趣味のサークル活動の場にもなっている。

こうした高齢者の地域交流・憩いの場の動きはあるが、若い世代向けの地域の交流・憩いの場の創出についても、必要と考える。

図 3 キタ☆ロックカフェ (広報いしかり平成 29 年 11 月号より引用)

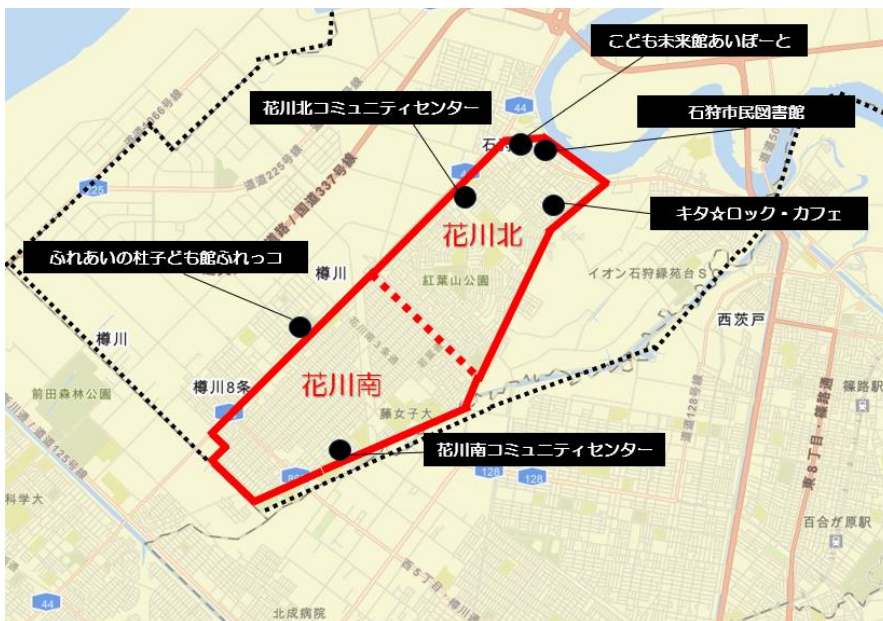


図 4 各交流拠点の配置 (石狩市 WebGIS により筆者作成)

(3-3) 交流の場に対する市民ニーズについて

令和 4 年度に市が実施した市民意識調査によると、「地域の様々な人が集まり、楽しみや悩みを共有できるような場（例えば、地域の子育てサロンや高齢者クラブなど）に参加してみたいと思いますか」という設問に対する回答は、以下のとおりの結果であった。

【全体】

	回答数	割合
参加している	86	8.7%
参加したい	196	19.9%
参加したいができない	247	25.0%
参加したくない	429	43.5%
無回答・無効回答	29	2.9%
回答者数合計	987	100.0%

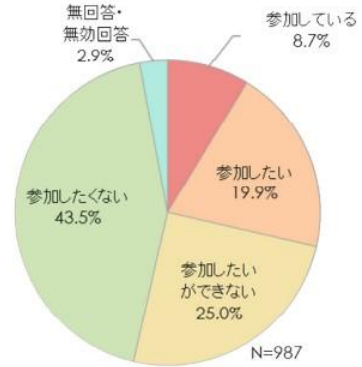


表 4 交流や楽しみ・悩みを共有できる場のニーズ調査
(令和 4 年度市民意識に関するアンケート調査から引用)

「参加したくない」というネガティブな回答が 43.5%である一方、「参加している」「参加したい」「参加したいができない」というポジティブな回答は 53.6%を占め、交流の場を求めるニーズがある。

なお、「参加したいができない」理由の結果は、「時間の都合がつかない」が最も多く 42.5%、次いで「興味・関心がない」が 29.4%、「人との交流が苦手である」が 28.4%であった。

性別・年齢別でみると、10 歳代～40 歳代、60 歳代男性と 10 歳代～20 歳代女性で「興味・関心がない」の割合が高く、若い世代向けを中心とした交流内容を充実させる必要がある。

	時間 の都合が つかない	興味・ 関心がない	人との 交流が 苦手である	情報 を入手する 手段がない	会場が 遠い・移動 手段がない	心参加費や 交通費などの 金銭面が	だ過去の 参加したが 期待外れ	その他	無回答
全体	46.7%	29.0%	28.0%	10.5%	7.4%	8.1%	4.4%	8.1%	5.0%
男性	44.5%	32.4%	27.0%	11.7%	6.4%	7.5%	5.0%	8.2%	5.3%
10歳代	36.5%	33.0%	18.5%	10.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%
20歳代	28.0%	34.3%	11.3%	14.3%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
30歳代	53.0%	42.9%	39.3%	7.1%	7.1%	10.7%	7.1%	0.0%	10.7%
40歳代	47.7%	31.8%	22.7%	11.4%	4.5%	6.8%	0.0%	13.0%	6.8%
50歳代	51.1%	33.3%	17.8%	11.1%	6.7%	8.9%	0.0%	6.7%	4.4%
60歳代	48.9%	40.4%	31.9%	10.0%	6.4%	6.4%	4.3%	4.3%	2.1%
70歳代	40.3%	19.4%	27.8%	15.3%	5.6%	5.6%	11.1%	13.9%	2.8%
80歳以上	29.0%	14.8%	33.3%	14.8%	11.1%	11.1%	7.4%	7.4%	11.1%
女性	48.3%	29.4%	29.4%	9.8%	7.6%	6.0%	3.7%	8.5%	4.8%
10歳代	43.8%	37.5%	43.8%	6.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
20歳代	53.3%	46.7%	53.3%	26.7%	6.7%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%
30歳代	59.1%	29.3%	31.8%	6.8%	4.5%	11.4%	2.9%	11.4%	2.9%
40歳代	65.8%	19.2%	21.9%	12.3%	8.2%	6.8%	2.7%	8.2%	2.7%
50歳代	50.0%	29.3%	27.0%	1.7%	6.3%	1.7%	1.7%	12.1%	3.4%
60歳代	37.5%	25.0%	33.3%	8.7%	0.9%	0.7%	8.3%	7.2%	5.6%
70歳代	49.3%	29.0%	28.3%	12.4%	8.9%	8.9%	8.9%	12.4%	6.9%
80歳以上	26.3%	10.8%	31.6%	5.3%	16.8%	10.5%	0.0%	5.3%	21.1%
その他・無回答	50.0%	37.5%	12.5%	6.3%	25.0%	25.0%	12.5%	0.0%	6.3%
住居・北生庫・八幡・緑ヶ原・本町・志摩・栗原	47.8%	28.3%	34.8%	10.9%	8.7%	10.9%	4.3%	2.2%	4.3%
新港・花川北・花川東・花川・緑ヶ原	43.4%	29.3%	29.9%	8.0%	7.3%	8.0%	4.4%	10.8%	5.2%
南川・花川・花川南	48.4%	28.7%	26.1%	13.5%	7.0%	8.2%	4.7%	7.6%	4.7%
厚田区	52.4%	28.6%	33.3%	0.0%	14.3%	9.5%	0.0%	4.8%	9.5%
厚田区	53.8%	30.8%	16.3%	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	7.7%

全体での回答割合より 10%以上高い 5%以上高い 5%以上低い 10%以上低い

表 5 交流等の場に参加したいが、できない理由の調査
(令和 4 年度市民意識に関するアンケート調査から引用)

また、「集まり（交流の場）への参加を検討する際に、どんなことを重視しますか」という設問に対しての結果は、以下の通りであった。

	性別 × 年代	n	時間の都合がつくこと	知り合いが増えること	社会貢献につながることに	知識や経験を活かせることに	地理的条件が良いこと	資格や技術が身につくことに	報酬が得られること	その他	特になし	無回答
全体		987	34.0%	28.7%	21.8%	22.5%	15.8%	12.1%	8.1%	1.4%	14.3%	18.6%
男性 計		409	33.0%	29.3%	25.7%	25.7%	12.7%	11.2%	8.3%	1.5%	14.4%	17.8%
10歳代		16	31.3%	18.8%	12.5%	18.8%	6.3%	6.3%	12.5%	0.0%	25.0%	12.5%
20歳代		10	30.0%	30.0%	20.0%	10.0%	30.0%	10.0%	10.0%	0.0%	30.0%	10.0%
30歳代		34	35.0%	32.4%	23.5%	35.3%	11.8%	20.0%	14.7%	0.0%	17.6%	2.9%
40歳代		54	31.5%	30.4%	31.5%	20.4%	27.4%	15.5%	9.3%	3.7%	14.5%	13.0%
50歳代		57	31.6%	24.6%	26.3%	26.3%	7.0%	14.0%	10.5%	5.3%	21.1%	12.3%
60歳代		76	43.4%	31.6%	27.6%	26.3%	21.1%	5.3%	9.2%	0.0%	11.8%	15.8%
70歳代		105	32.4%	31.4%	24.8%	27.6%	12.4%	10.5%	4.8%	0.0%	12.4%	25.7%
80歳以上		56	21.4%	27.3%	23.0%	25.0%	12.3%	7.1%	3.3%	1.8%	7.1%	28.6%
女性 計		557	35.2%	28.7%	19.0%	20.3%	17.8%	12.9%	8.1%	1.4%	13.8%	19.6%
10歳代		21	19.0%	33.3%	42.9%	28.6%	0.0%	14.3%	28.6%	0.0%	9.5%	0.0%
20歳代		26	38.5%	19.2%	30.8%	30.8%	23.1%	30.8%	19.2%	0.0%	19.2%	7.7%
30歳代		89	47.6%	30.3%	8.1%	20.3%	16.9%	20.3%	13.6%	1.7%	23.7%	6.8%
40歳代		93	48.4%	34.3%	23.2%	22.1%	20.0%	20.0%	10.5%	4.2%	12.6%	7.4%
50歳代		84	37.5%	24.4%	24.1%	19.5%	14.9%	11.5%	8.0%	0.0%	19.2%	14.9%
60歳代		103	23.8%	23.8%	13.3%	12.4%	16.2%	5.7%	4.8%	1.0%	13.3%	35.2%
70歳代		130	30.8%	32.3%	19.2%	22.3%	22.3%	9.2%	1.6%	1.5%	7.7%	26.2%
80歳以上		131	26.8%	22.9%	12.2%	19.9%	12.9%	6.8%	6.8%	0.0%	16.1%	35.3%
その他・無回答		21	23.8%	14.3%	19.0%	19.0%	23.8%	4.8%	4.8%	0.0%	23.8%	9.5%
生駒・花川北・八幡・緑ヶ原・本町・志美・美音位		68	27.9%	36.8%	16.2%	22.1%	14.7%	13.2%	7.4%	2.9%	14.7%	19.1%
新港・花川北・花川東・花川南・緑苑台		372	33.1%	23.4%	21.5%	21.8%	16.4%	8.3%	9.1%	1.1%	16.1%	21.5%
樽川・花川・花川南		492	35.4%	31.1%	23.2%	22.8%	16.1%	14.6%	8.1%	1.6%	13.2%	15.9%
厚田区		30	30.0%	26.7%	23.3%	26.7%	13.3%	16.7%	3.3%	0.0%	13.3%	23.3%
厚田区		20	45.0%	40.0%	15.0%	30.0%	10.0%	10.0%	0.0%	0.0%	4.0%	20.0%

全体での回答割合より 10%以上高い 5%以上高い 5%以上低い 10%以上低い

表 6 交流の場へ参加の検討をする際に重視すること
(令和 4 年度市民意識に関するアンケート調査から引用)

「時間の都合がつくこと」が最も多く 34.0%、次いで「知り合いが増えること」が 28.7%であった。性別・年齢別で見ると、男性 60 歳代、女性 30 歳代～40 歳代で「時間の都合がつくこと」の割合が高い。また、男性 30～40 歳代、女性 20～40 歳代で「資格や技術が身につくこと」を重視する割合が高く、自己の能力を磨くことや生活向上に資する交流内容が求められている。

3. 地域の人々が求める交流拠点の在り方について

花川北・南地区は人口減少が続いており、前章で述べた年代別人口分布図からは、とりわけ 30 歳代以下の人口が、40 歳代以上の人口と比較し少ない状況であり、将来的には現在首都圏の郊外住宅地で、すでに報道されているような空き家問題が生じ、建物の老朽化や火災による危険性、治安や衛生状況の悪化、景観への悪影響などが深刻化、さらには、担い手不足により、自治会をはじめ地域コミュニティ維持の困難等、将来的にまちの持続が難しくなることも予想され、若い世代の層を厚くする必要がある。

札幌近郊にベッドタウンとしてのまちが複数ある状況下で、石狩市に住みたいと言われるようになるには、近郊のまちよりも地域の魅力を高める取り組みが必要である。そして、核家族化が進む傾向にある本市では、地域に住む人が地域から孤立や分断が生じないよう、日頃からコミュニケーションが取れる関係が築き上げられ、地域の人同士がぬくもりのある豊かな暮らしを営めるようにする必要があり、それには今住んでいる人のニーズにあった交流の場が必要である。

前章で述べた「石狩ふれあいの杜公園」は、44,901 m²の敷地を有し、アスレチックをはじめとした大型の遊具や、こどもの森、フラワーガーデン、遊歩道があり散策が出来た

り、子ども向けの遊水池があるほか、広々とした芝生があることから、テントを持参し使用している親子がいたり、ピクニックの場として利用されたりと、子どもが遊ぶには適している施設となっている。そのため、子育て世代には人気があり、休日には混雑することもある。

また、敷地内には、2022年10月開館した子ども館「ふれっコ」がある。「ふれっコ」の機能には、こどもの遊び・学び場所、居場所としての児童館・放課後児童クラブ、子育てする親同士のコミュニケーションの場として子育てサロンがある。

前章で述べた、市民ニーズの「交流に参加したいが、できない」理由では、10歳代～40歳代の男性、10歳代～20歳代女性の若い年代で「興味・関心がない」ことの割合が高いことから、これらの世代に興味・関心を持ってもらう交流のコンテンツが必要である。

石狩ふれあいの杜公園は、子育て世代を中心に若い世代の利用者が多く、日常的に人流があることから、敷地内に新たな交流の場を設定することを提案したい。また、利用者の中心として、若い世代が多くいることから、若者目線での発想も必要と考え、花川南地区にある藤女子大学との連携を考える。同大学（花川キャンパス）の人間生活学科、食物栄養学科との連携を検討し、参考事例を通して、交流拠点の企画・運営をハード面とソフト面について、石狩市の地域事情に合わせ考えていく事とする。



図 5 石狩ふれあいの杜公園と藤女子大学の配置
(石狩市 WebGIS により筆者作成)



図 6 公園内配置図 (園内設置看板をもとに作成)



写真 1 芝生広場 (石狩市 HP から引用)



写真 2 遊具と遊水池 (石狩市 HP から引用)



写真 3 ふれあいの杜こども館ふれっコ
(石狩市東京事務所フェイスブックから引用)

4. 交流拠点の参考事例「若者クリエイティブコンテナ (Youth Creative Container Ube) 【山口県宇部市】」について

山口県宇部市の中心街の衰退により空洞化した同市中央町エリアの一角で、山口大学の建築学生らが中心となり、「楽しく暮らし続けるまち、人々の出会いがあり、そこに行けば何か面白いことがあるまちに取り戻すために、地域を考える様々な主体が対等な立場で話せる連携の場」を創出し、若者の目線でのまちづくりが行われている。

宇部市では、中央町エリアを中心に、若者や子育て世帯の居住促進、生活支援機能、創業機能がそろったまちづくりを進める方針のもと、平成 29 年 4 月に山口大学と連携し、多世代・異業種の交流・連携をする場として「若者クリエイティブコンテナ(以下、YCCU)」が設置された。その活動・交流の拠点は、コンテナ施設、カフェ、しばふ広場から構成される。



写真 4 コンテナ施設 (カフェ・フリースペース)
(筆者撮影)



写真 5 しばふ広場 (筆者撮影)

コンテナ施設には、学生 1 名が常駐し、祝日・お盆・年末年始を除いて毎日開館し、仕事や勉強、読書やセミナーのためのフリースペースとして、無料で利用を可能としている。しばふ広場は、日常では地域の人たちに、大人・子どもの遊び場やランチ・BBQ スペースとして利用されているほか、各種イベント会場としても利用され、学生が企画したビ

アガーデンの会場や、建築学生が講義で考えた地域の設計課題の発表の場、しばふ広場等の設置物を作成するワークショップの場として、地域交流の促進を目的に、大人から子どもまで多世代の地域人たちに、楽しんでもらいながら地域の人を巻き込み運営されている。住民の活動や趣味でつながる拠点を設置することは、まちのコミュニティや活力を維持していくために必要との考えがあるとのことである。

5. 石狩市における施策提案

石狩ふれあいの杜公園内には、児童館、子育て支援施設が配置され、子育てする保護者同士の交流の場は充実しているが、多世代の地域住民で交流する場が不足していることから、YCCU を参考に、大学連携による新たな交流の場の創出を考えていく事とする。

(1) 「石狩ふれあいの杜公園」内に多世代交流拠点を設置

石狩ふれあいの杜公園内に、多世代の地域住民で交流する場として、建物建設よりも安価で設置が可能なコンテナ施設を設置し、地域の人の仕事や勉強、読書やセミナーのためのフリースペースとして利用可能にし、日常の誘客を行う。また、カフェを併設することで、憩いの場を設け、公園や児童施設の利用者とコンテナ施設の利用者との交流の場を設ける。なお、コンテナ施設の管理・運営は、YCCU の事例では山口大学の学生が積極的に関与しているが、持続可能性の面で負担が大きいことから、他事業主体に委託するなどの必要があると考える。

(2) 藤女子大学とのソフト面における連携

YCCU の事例では、山口大学の建築学生との連携により、建築系学科の特色を活かし、地域での交流促進を目的に、学生が考えた宇部市内を対象とした設計課題を地域住民へ発表とする場や、学生が発案したイベントの開催の場として活用されている。

当市では、藤女子大学の食物栄養学科と人間生活学科との連携を検討する。例えば食物栄養学科では管理栄養士・栄養士を目指す学生による、食と栄養をテーマにした地域課題への研究の発表の場や健康教室の開催、人間生活学科では、自治体等と地域課題を解決するためのプロジェクトに関して学んでいることから、同学科との連携による、まちづくりサロンの開催が考えられる。テーマに応じたゲストスピーカーを招へいし、事例紹介や話題提供を通じて、地域住民に知見を深めてもらい、まちづくりへの意識を地域の人に醸成しながら、まちのコミュニティの維持や活力の向上へとつなげる。

大学連携による若い世代の感覚ならではの発想によるイベントの企画、SNS・HP・リーフレット・ブログ等の各種媒体を活用した積極的なイベント情報の発信、周知を行う。

(3) 「石狩まちゼミ」・「いしかり市民カレッジ」との連携

市民意識調査でニーズのある「自己の能力磨きや生活の質向上」への対応として、石狩市商店会連合会主催の地元の店主が講師となって行われている、プロならではの技術的な知識やコツが学べるミニ講座「石狩まちゼミ」との連携のほか、市民ボランティアによって主催されている、各分野の専門家を招いて市民が学ぶという生涯学習講座「いしかり市民カレッジ」との連携を検討し、学ぶことが出来る交流の接点の場として考えることとする。



図 7 「石狩まちゼミ」

(石狩まちゼミフェイスブックから引用)



図 8 「いしかり市民カレッジ」

(いしかり市民カレッジHPから引用)

6. おわりに

多世代の幅広い人たちを対象に交流拠点を創出するには、交流する人達にとって、共通・共有するものがないと、交流の目的がなくなってしまい、交流拠点を設置しても、利用者を見込めない。人々が交流するには、人と人とを媒介する何かが必要であり、参考事例においても、楽しんだり、リラックスできる空間であったり、興味や関心を持ち、共感出来るものが、人同士を媒介し人を集めていることを学んだ。本レポートの提案では、子育て施設が立地し、子育て世代の利用者が多い公園敷地内に、若い世代を切り口にした地域の多世代に交流をつなげることを目的とした交流拠点の設置を検討している中で、交流するのに媒介するものが、何である必要があるのかということを考えさせられた。

最後に、本市の状況として、生活する上で移動には車の利用頻度が高く、モータリゼーションの上に、日常が成り立っている地域である。地域の交通として、軌道系交通機関を持たないまちであり、移動に便利な車が利用されるのは必然の状況かと考えられるが、出発地と目的地の往復しかなく、徒歩では可能な「ふらっと立ち寄り」という機会がなく、地域での偶発的な交流のきっかけが失われていることが考えられる。車利用が前提につくられた郊外型の大型ショッピングセンターの進出はあるものの、そうした施設は、他の多くの都市にもあり、まちの個性を薄めてしまう要因になっていると考えられる。今回のゼミでの学びを通して、モータリゼーションとまちの個性は影響しあう関係であることを学んだ。本格的に地域での交流が起こり、新たなまちづくりの機運が高まり、まちの個性が出て来るときは、地域の人々が車を降りるようになった時だと考えられ、この点について本市が取り組むべき大きな課題であると考えられる。

【参考文献】

「石狩市統計情報」

サイト <https://www.city.ishikari.hokkaido.jp/soshiki/soumu/3227.html>

「令和4年度市民意識に関するアンケート調査」(石狩市)

サイト <https://www.city.ishikari.hokkaido.jp/soshiki/kikaku/82634.html>

「若者クリエイティブコンテナ (Youth Creative Container Ube)」

サイト <http://yccu.place/>